

博士学位論文

語りとヴィジュアルリティ

——シャーロット・ブロンテの一人称小説の軌跡——

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

国際多元文化専攻

ヨーロッパ言語文化講座

学籍番号：531502037

杉 村 藍

2021年1月

本論文の構成と概要

序論

シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-55) は少女期から創作活動を通して物語と絵画が相互に影響しあう独特の語り方を身につけていった。彼女の語りの技法と作品に描かれる絵画的・視覚的な要素は、それぞれ独立した研究テーマとしてブロンテ研究の一翼を担ってきた。しかし、物語と絵画が結びついた彼女の創作方法を考える時、はたして両者は個別に取り上げられるべきものなのか。本論文では、シャーロットが強い関心を示して取り組んできた語り的手法と物語のヴィジュアルリティ (ヴィジュアルな要素) は、融合することによって彼女独自の表現を生み出しているという仮説を立て、その仮説を実証した。

第一部 リアリズムへの挑戦——『教授』

『教授』(*The Professor*, 1857) はシャーロットが少女時代から長く続いた初期作品の世界と決別し、職業作家を目指して最初に執筆した小説である。だが、彼女の初めての試みはきこちなく、結局 9 回も出版社に拒絶され、生前に出版されることはなかった。ここでは、『教授』が失敗作とされる理由にも、語り的手法や視覚的要素が関係していると考え、それを論証した。

第 1 章 都合のよい真実——『教授』における科学的観察

『教授』では、19 世紀に欧米で人気を博していた顔面や頭骨といった外見を注視する観相学と骨相学が、ヴィジュアルな要素として重要な役割を果たしている。興味深いのは、語り手であり主人公でもあるウィリアム・クリムズワスが、あまり重要でない登場人物の描写にこの擬似科学に基づく分析を多用している一方で、自分自身を含めた中心人物たちに関してはそうした描写を拒んでいる点である。これは地位も財産もなく社会的弱者とも言えるクリムズワスが生存のために採った方策と関係している。彼は「観察」という見る行為によって情報を収集し、その分析に観相学や骨相学を用いることで科学的な客観性を保持しようとするが、同時に他者の視線を避けることで自身の情報を不用意に相手に与えることなく優位を確保しようとしているのだ。自分の外見について多くを語ろうとしないのは一種の情報統制である。外貌の詳細な描写、特に観相学や骨相学の判断材料となる説明を制限することで自己防衛をしているのである。換言すれば、彼は自分に「都合のよい真実」だけを選び、巧みに組み合わせることで、勤勉で誠実な男を描いた理想的な成功物語として自分の半生を語り直しているのだ。このように都合のよい理想像を示そうと自身の外貌に関する情報を制限した結果、出版当時の読者にはほとんど印象を残すことがなかった。本章では、この作為的とも言える選択的な眼差しこそ、小説を失敗作に貶めているという点を明らかにした。

第 2 章 破綻する語り——『教授』におけるクリムズワスの創造性と語りの綻び

『教授』の「序文」で、シャーロットは「現実の生きた男たち」を描こうとリアリズムに基づいた創作方針を表明している。そのために作品の主な舞台となるブリュッセルの描写にも実在する街や通りが忠実に再現されているのだが、語り手クリムズワスは時として

描写を一方向的に切り上げてしまったり、あえて語るのを控えたりすることがあり、その物語は彼が見たままを単純に言葉に移し変えたとは言いがたい。『教授』の未定原稿の断篇を比較してみると、初期作品後の習作から『教授』の執筆、改訂の試みという一連の流れの中で彼女が最終的に選択したのは、主人公について他者が語るのではなく、自らに語らせるという手法であることが判明する。第三者を介さないことで、伝えるべき情報の選択も伝え方も主人公自身がすべてコントロールできるのである。しかし、そうした支配的な語りを駆使して、成功譚として語ろうとするクリムズワスの欲望こそが、彼の語りを歪めてしまっていると言える。彼の意図的な視線と語りには初めての小説を何とかコントロールしようともがく作家シャーロットの必死な姿が見てとれるが、そのことが本章では多くの論拠とともに証明されている。

第二部：語りとヴィジュアルリティの融合——『ジェイン・エア』

シャーロットは、『教授』の失敗体験を踏み台にして仕上げた第2作『ジェイン・エア』(Jane Eyre, 1847)において、女性の主人公を一人称の語り手として起用するという当時としては新しい手法に挑んでいる。この語り的手法が少女時代から絵画修行を通して育んできたシャーロットのヴィジュアルな視点とどのように融合しているかについて論じた。

第3章 語り手への道のり——ジェイン・エアの描いた軌跡

出版と同時にベストセラーとなった『ジェイン・エア』には最後まで一気に読み通させる勢いと魅力があるが、主人公であり語り手でもあるジェインは最初から優れた語り手だったわけではない。興味深いことに、物語は少女ジェインが「気持ちよく口がきけるようになるまで黙っていなさい」と、一人称の語り手である彼女自身が語ることを禁じられる場面から始まる。彼女は成長後も語り手というより聞き手として天性の資質を発揮している。相手が心に秘めた思いを時には自然に引き出し、時には相手の心に踏み込むことによって聞き出すのだ。また、ジェインは注意深い観察者でもある。対象をある時は密かに見つめ、ある時は観相学や骨相学の知識を駆使して外見だけでなく内面までも見透かす。こうした「聞く」「見る」といった語りと無関係に思える行動が、彼女にとっては自分の物語を魅力的なものとして語るための情報収集活動となっている。しかしながら、ジェインは集めた情報をすべて語っているわけではない。ロチェスターをはじめとする他の登場人物から得た情報を保留しておくことで、彼女はより多くの情報を持つ者として優位に立つことができるのだが、そこには情報を誰が語るのかという語りの主権をめぐる抗争の構図を読み取ることができる。このせめぎ合いにおいて、彼女がいかにして語りの覇権を握るのか、そのためにどんな方策を講じているのかを分析し、語り手として自分の半生を語り出すまでに10年もの時間を要した理由を明らかにした。

第4章 『ジェイン・エア』におけるヴィジュアルリティとその効果——ビューイックの謎を解く

『ジェイン・エア』にはヒロインのジェインが見たり描いたりする絵が多く登場する。この章では、小説冒頭のトマス・ビューイックの『英国鳥類史』に掲載された木版画の挿絵が担っている重要な働きを浮き彫りにした。ジェインのような幼い子供が好みそうにない陰鬱な版画が次々と描写され、読者はこれらの挿絵とジェインとの関係がつかめないま

ま物語を読み進むことになる。しかし、木版画の記述が長々と続くという、この不可思議さこそ読者にストーリーとの関連を解き明かそうとさせる誘因となっている。墓場や難破船など暗然たるモチーフは、少女ジェインの内面の表象となっているだけでなく、読者が彼女の視線の先を共に追うことで、いつしか彼女と一体化していく効果も備えているように思える。成長したジェイン自身による第13章の3枚の空想画もまた、ビューイックの影響が色濃く見て取れる点で重要である。沈みかけた船や極地の冰山などのモチーフや全体の寂寞とした雰囲気も共通している点であるが、少女のジェインと大人になったジェインとでは対象とする絵（挿絵）を説明する際に描写の仕方が異なっている。これらの絵の説明は視覚的な芸術作品を言語によって詳細に描写するエクフラシスに該当するものである。また、ヒロインの少女時代から始まる自伝を成立させる上で、ビューイックが果たしている役割は大きい。長く続く挿絵の説明は、興味を持った対象に没入する10歳の子供の姿をリアルに表現しており、この自伝が成人したジェインによってさらに10年の時を経た上で執筆されているという時間の隔たりを感じさせないからである。

第三部：実人生を映した歪み——『ヴィレット』

最後の小説『ヴィレット』(Villette, 1853)において、シャーロットは再び女性主人公が一人称の語り手を兼ねるスタイルを採用したが、ヒロインのルーシー・スノウはジェインと異なり、その語りは時に曖昧で読者にさえ事実を明かさないことがある。「信頼できない語り手」と呼ばれるルーシーの語り、そして彼女の視線の背後に作家シャーロットの人生体験の影響を読み取った。

第5章 黙した語り手——ルーシー・スノウが描く曖昧な結末

『ヴィレット』の主人公ルーシー・スノウには謎が多い。物語のヒロインでありながら、その立場を主張せず、目立たぬように影に引っ込んでいる。彼女が見せる相矛盾した性質とその行動に注目し、その起因を彼女の過去の経験に探ることで、子供時代の過酷な経験を通して生き残るための自己防衛策として自分の感情を抑圧していることが判明する。こうしたルーシーの過激な自己抑圧こそ、彼女の行動と語りに深刻な歪みを生じさせ、彼女を「信頼できない語り手」にしてしまっているのだ。本章ではまた、物語の最後でムッシュ・ポールがどうなったのか、結末を曖昧に残したままにしている理由を探求し、一般にシャーロットの父親が幸福な結末を望んだためとされているのに対し、彼女が『ヴィレット』執筆前に相次いで3人の弟妹を亡くすという悲劇的な経験が影響していることが大きな理由になっていることを論証した。

第6章 物語を紡ぐ光と影——『ヴィレット』におけるヒロインの謎

『ヴィレット』のオープニングを読んだ者は小説の主人公を風変わりな少女ポーリーナ・ハウムだと思っただろうが、第4章で姿を消した彼女に代わり、それまで傍観者として彼女を観察してきたルーシー・スノウが突如として読者の前に現われる点に注意する必要がある。この小説の異なる書き出しである3つの断篇と『ヴィレット』の清書原稿の修正箇所に着目し、シャーロットが最初からルーシーをヒロインに据えることを意図して書いたものであることを明らかにした。ポーリーナの容姿や身分は「人生の日向」を歩むために生まれてきた者のための設定であり、彼女と対照的にルーシーの「人生の道のり

は・・・山の日陰側を辿っている」。この光と影（陰）の対照を際立たせることこそが、人生の日陰を生きるルーシーの姿をよりリアルに表現する方法だったのではあるまいか。作品冒頭でポーリーナは人々の注意を惹きつけるが、それは彼女がルーシーの抱える闇の深さを強調する存在として利用されているからである。明暗に象徴される運命論的な考え方は、19世紀イギリスが経済的発展を遂げる一方で、「二つの国民」という社会格差が深刻化した状況と呼応するだけでなく、シャーロットが弟妹を失った絶望感を反映している点からも、彼女が経験した苦悶がそのまま作品にも歪みとして投影されていることを立証した。

結論

本論文では、シャーロット・ブロンテの3つの小説の分析を通して、それぞれの主人公を兼ねる一人称の語り手がどのように語り、その視点を時には補完し、時には活かすために様々な視覚的な要素、ヴィジュアルリティが活用されていることを明らかにした。幼い頃から文章を書き、絵を描いて創作活動をしてきたシャーロットは、見るという行為に強い関心を持っていたが、彼女の作品では語りの技法、絵画的描写力の両者が緊密に影響しあって作品世界が構築されており、これこそが見ることに取り憑かれた時代、19世紀前半のイギリスを生きたシャーロットの作品の大きな特徴である。そして、その特徴を語りとヴィジュアルリティの融合という視点から分析した点に本論文の独自性がある。